

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

2025年 3月 22日	
所属部局・学年	野生動物研究センター
氏名	關 真理江

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、丹波篠山
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
丹波篠山実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
2025年 2月 18日 ~ 2025年 2月 19日 (2日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (京都大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
里地里山問題研究所 鈴木 克哉
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本渡航は、2024年度に開催されたPWS symposiumで登壇された川添氏の所属する里地里山問題研究所(さともん)が主催するじゅうがい対策プログラムに関するものである。調査は2月18日から19日にかけて、兵庫県にある丹波篠山市にて行われた。丹波篠山を含む兵庫の獣害対策機構は、ニホンザルやニホンジカの個体数管理や調査のモデルが整っている数少ない組織である。
実習の目標はさともんが掲げるひらがなのじゅうがい(獣害、獣害対策のための市民一帯の取り組み)を学ぶことで、じゅうがいへの枠組みを学び、研究者として還元できる方法を模索することであった。

図1 実習の様子
プログラムは2日間の中で、じゅうがいとは何かと、概要の一側面として行われているニホンザル追跡、ライトセンサス、また地元住民との座談会を行った。(写真1,2) プログラムの中でさともん代表の鈴木氏は、ニホンザルやニホンジカの個体数管理には、行政による大規模な個体数調整(狩猟)ではとどまらず、地域ごとの個体数管理、被害を増やさないための囲い措置などの徹底、また野生動物の追跡など局所的な対策を行わなければならない、その実行には行政のみの取り組みでは不十分であり、その地に暮らす市民、さともんなどの組織を巻き込んだ地域一体型の枠組みを作っていく必要がある、と述べた。 本プログラムを行うまで、私は獣害対策の一番の有用な手段は直接的な個体数管理手段である狩猟であり、それを行政が取り仕切っていくべきだと考えていたので、実際に
トップダウンに拘らないさともんのじゅうがい対策は新鮮な取り組みだった。
そのほか、ニホンザル追跡では、実際に個体数管理の一環で行われているニホンザル追跡を体験した。この日はちょうど捕獲檻にニホンザルが収容された日でもあったが、全頭殺さず雄のみを処分し雌は個体数を減らさないように逃がすなど、生態に即した対応をとっていることが印象的だった。 ライトセンサスでは、夜に林道内を調査しシカや夜行性哺乳類を探索した。冬も真っ盛りの時期なのでニホンジカが数頭見つかるのみで、そのニホンジカも動きがかなり鈍かった。交尾期を過ぎた冬は雌ジカの妊娠期に該当するので、その時期ニホンジカの活動が鈍くなるのだと考えた。
本プログラムを通じて、ヒトとヒトのかかわりを通じて村一帯でじゅうがいに携わっていくにあつ
※メンター(PWSプログラム指導教員)が確認済の報告書を【 report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp 】宛にご提出ください。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



て必要な地域の現状、動物の生態の一端を学ぶことが出来た。じゅうがいは、人と動物が共に生き、関わるうえで必要な枠組みなのだと実感することが出来た。この取り組みを自身の研究でもある対馬の自然に還元し、安定した個体数管理のための地域連携の調整プラン作成に役立てていきたい。

図 2 最終日に行われた座談会

6. その他 (特記事項など)